

被災地からの声 10年の歩み

NHK仙台放送局 チーフアナウンサー

津田 喜章

10年前、自分の番組がここまで続くなど、全く思っていなかった。

NHKが東北地方で放送している震災番組「被災地からの声」は、震災の9日後に放送が始まった。岩手・宮城・福島の被災地を隔々まで訪ね、出会った方々に「いま一番言いたいこと」を聞いてきた。撮影した声は取捨選択せずに必ず放送し、ナレーションも音楽も付けない。VTR以外は、私が一人で画面に向かい、取材実感を述べたり、声の背景にある現状やデータを紹介する。出演した方は4,800人ほどで、出会って話し込んでも結局カメラを遠慮する方もいるため、正確には数万人以上と話したはずだ。

市民の“震災時の証言”を集めたアーカイブは、国内にたくさんある。一方この番組は、いわば市民の“復興の証言”を集めたアーカイブだ。たった一つの質問で、10年にわたり被災した庶民の歩みを記録したアーカイブは、国内唯一ではなからうか。

最近、私は被災した年に出会った方々のことを、改めて思い出している。

ある女性は、行方不明だった夫の遺骨が見つかったと、取材の後日、うれしさのあまり電話をかけてきた。当時の被災地は、人の生死ではなく、遺体の有無がうれしさと悲しさの境界だった。避難所暮らしの母親は、「お母さんの作ったお弁当が食べたい」と話す息子の横で、情けなさのあまり号泣した。親戚の家に避難したものの、これ以上迷惑はかけられないと、自ら不便な避難所に戻ってきた障がい者もいた。情報がうまく得られず、仮設住宅の入居要件から漏れて、壊れたままの自宅で暮らす人もいた（今なお住み続ける人もいる）。

他にも、「どうして生きていったらいいかわかりません」と暗い表情でため息をつく人、社員を

守るため、肉親を失った悲しみを封印して資金繰りに奔走する経営者がいた。ある日、復旧工事の女性作業員が、「へとへとに働いて眠りたい」と言った。経営していたスナックが流され、家族の今後の生活を考えると睡眠もままならず、へとへとに働けば眠れるかもしれない、体を動かしていれば悩まなくて済むという思いから、カメラの前で絞り出した言葉だった。

さらに福島の現実には、ひたすら愕然とした。放射線対策のため、沿岸部では津波犠牲者の遺体まで放置され、行方不明者の捜索もできなかった。“とりあえず”という指示で避難したまま、ペットや家畜は餓死し、家も店も朽ち果て、田畑は原野に変わった。「やむにやまれず20km圏の検問を突破して家に行こうとしたら、警察に制止された」とカメラの前で語った男性もいる。“安全”と言われ続けた挙句、“想定外”の一言で片づけられる理不尽さに、収まらない怒りや嗚咽をおつける方々が何人もいた。

あれから10年…。岩手や宮城では、どこに行っても復興事業がほぼ完了した。一新されたきれいな街並みを見ると、人間の力も捨てたもんじゃないと素直に思う。福島では帰還困難区域を除いて避難指示が解除され、福島第一原発のお膝元である大熊町でも、一昨年からの住民の居住が始まっている。海に全てを奪われた漁師たちは、それでも海を愛し、漁業を復活させた。店主たちは、地元の役に立ちたい、地元で明るい話題を届けたいと、五里霧中でも商売を復活させた。支援に励まされ、多くの人が「今日一日、頑張ってみよう」と10年の月日を重ねてきた。カメラを通して我々が見てきた10年は、東北人の“辛抱”、“根性”、そして“尊厳”のアーカイブである。

被災地では、ごく普通の会話をしているつも

りしていると、相手から何気なく、“お父さんが死んだ”とか、“子どもがまだ行方不明”といった言葉が出る。被災地の人々は大なり小なり、心の中に深い思いを抱えているが、決して表には出さない。その思いにたどり着くかどうかは、全て『想像力』にかかっている。ほんの少しの想像力の欠如で、被災者を無意識に傷つけるメディアやボランティアも、ずいぶん見聞きした。“家が流された=住む所が無くなった”という事実関係はもち

ろん、“何十年と働いてローンを返したのに、苦労が水の泡になった”とか、“大切な子育ての思い出が詰まっていたのに、思い出がまるまる消えてしまった”という、精神的な被害もきちんと想像した上で向き合わない限り、信頼は生まれない。被災者が口に出した言葉に、私たちが想像力を加えてはじめて、被災者への“寄り添い”が形になる。そのことを忘れてはならない。